

係を類推によりて他人と我との關係にも適應せんとするものである。吾々は類推によりて、我と等しきものゝ存在を許す、されど之を以つて、我と同じ、又は、我と一心同體なりと容易く見做すか、余も亦謬見を懷ける一人なるか。

附録の一つ「宗教と道德」では兩者の關係を述べて、道德は宗教化するを要し、宗教は道德化するを主要すと爲し、眞の宗教と、眞の道德とは畢竟一である、何等の差別が存しないと説き、「自覺の徹底」では自覺の起る場合を擧げ、徹底したる自覺を絶叫して居られる。

全巻を通じて述べられて居る處國家と倫理、殊に我國體と道德とに關し闡明せらるゝ處決して尠少で、無いことは疑はない。されど本論並に「宗教と道德」とに縷々辯論せらるゝ多即一主義、否、同圓異中心主義は諸物を打して渾然たる一體とせらるゝ處甚だ妙を極めてゐる、乍然渾一主義は動もすれば、渾沌主義に陥ることなきかを恐る。本論三百有十三頁嚴密なる章節の別なく、本文中の主要なる字句を摘出して目次とせらるゝ爲、連り込まれて漫然たる愚稿を草するに到れるも以上所々に披瀝したる質疑を散ずるの機を與へらるれば幸なり。(發行所、東京市小石川區竹早町三十七大日本學術協會、定價貳圓) (尾生光三郎)

## 印度の佛教

荻原雲來著

佛教は印度の宗教思想が發達變化せる中の一階段であるから、その思想が本體論、宇宙論、心理、倫理、又來世論等に於て、從前の思想と密接の連絡があり、從つて佛教思想の起原と變遷とを

明にせんとせば、その從つて來る所を知らなければならぬ、佛教に於ける厭世觀、出家修道、輪廻と解脫、業感緣起、根本無明、智明、捨離と觀行、これ等決して佛陀の創説ではなくて、教論、ジャイナ教等と等しくその源は皆之を優波尼妙土のアートマン説に由來するのである、然れども當時佛教以前の諸學派に於ては、徒らに身を窮しめ、精を凝して苦行し、以て生天解脫を希望し、或は又口に深奥の哲理を談ずるも身に解脫の因を修せざるもあり、茲にこれ等無義の苦行を廢し、空論を斥げ、誠實に眞解脫の道求めんとする氣運が一般社會に勃興して來た、この氣運に乘じ、種姓の如何を論ぜず、貧富の懸隔を問はず、平等に清新なる道德的宗教を弘布したものは即ち釋尊であつた。その釋尊の宗教が第十二世紀回々教の壓迫を受けて衰滅せんとする期に至るまで、諸他の學派と交渉關係し、大小顯密自他兩力の教理並び起り、年所を經るに從つて漸次發達變化し、それ等學說興亡の時代の如き相互錯雜の爲に今日より推して之を知る事が出来ないのである。併し著者は便宜のためその重なる點に就て、(一)根本佛教發達時代——佛入滅より龍樹の初めまで、(二)大乘教隆興時代——龍樹より第二の法稱まで、(三)佛教衰頹時代——第二の法稱より摩那王朝の終りまで、の三期に區分して研究して居らるゝのである、けれども本書に於ては第一、第二の兩時代の研究に止まり、第三期は紙數の制限が許さなかつた爲めではあらうが、「其間の年代の長きに比して記すべきこと多からず、大抵密教特に呪術教弘傳の事蹟のみ」として略されたことは遺憾に思はざるでもない。(以上總説に就て)。

著者は別説に於て、(一)釋尊の略傳、(二)所説の法、(三)佛弟子衆、(四)佛滅後の佛教の四項に大別し、その一々を更に小節に開きて述べて居らるゝ。

輪廻は當時印度一般に信ぜられたる所であつて、釋尊も亦この思想を繼承した、然るに他の學徒は業力に依りて我が輪廻すと立つるに反し、釋尊は我を排斥したのであるから輪廻の主體がある譯がない。唯煩惱と業とを根本とした緣起法のみで、釋尊の成道は、輪廻と業感の理は既定の事實としてその上に立ち、内觀思惟して、一切諸法は無我にして、唯緣起あるのみといふことを知見した、苦心思惟の成等正覺のその眞理、昨日まで緣起法の實相に達せず、無限に眼を測し、空中に有を計し、我他を差別し、苦樂を對立し、營々として劬勞し來りしも、惟へばこれ唯無明の所爲のみ、一旦緣起觀成就すれば、快力亂麻を斷つが如く、旭日東天に昇りて長夜の大闇一時に滅するが如きその眞理を、自行化他の慈悲心より、釋尊は自覺獨得の正法を始めて天下に公表し、一切の邪説異論不善法を破碎せんが爲に、之を轉法輪したのである、しかも釋尊の説法は當時普通の宗教家の如く、深遠なる理論を稱へて少數の學者に對したのもない、又無益の苦行を勸めて身心を徒勞せしめたのもない、着實なる教旨と淺近易修の方法とを以て、一切の衆生をして唯應分に修練せしめ心性を改善し、惡を去り徳に進むるを以てその主眼とし、世を悲愍すること極めて大に教化甚だ勉めたのであつた。そして「汝等師主を失なへりと謂ふ勿れ、我れ逝ける後は我が所説の法と律とは是れ汝等の師なり」、「生者必ず滅す、汝等精進なれ、放逸なること勿れ」との教

誡を遺せる釋尊の涅槃は、佛弟子に取りては信仰の中心得脱の標本保證、正法體現者の涅槃の實現であつた(釋尊の略傳)。

釋尊成道の時觀察した緣起は佛教の根本原理であつて、又轉法輪の内容をなし、佛陀一切の施教はこの源泉より流出して居るのである、著者は茲に緣起説に對する種々の異説を擧げ、最後に主として有部宗の見解に基きその説明を試み、そして世間の苦は成道以前より釋尊の念頭を去らざる思想であつて、如何にしてこの苦を脱せんかといふ欲求が彼れが求道解脫の出發點であつたと論じ、彼れは今世の苦果は過去の苦因に由り、未來の苦果は今世の苦因に由る、こゝにこの因果の連鎖を斷ちて方めて眞の解脫を得ることに想到したのであつた、苦集滅道の四聖諦が彼れ成道の時、彼れの内觀に依りて知見せられ組織せられたことは理の當然である、釋尊一代の説教は實にこの四聖諦と以てその中心根柢となすべきであるとし、次に四聖諦の一々に就て簡單ではあるが併し明截に論述せられ、殊に遺諦に就ては比較的詳細に互り、三十七道品と三學との關係までも明快に説かれてある(所説の法)。

佛教を信じ修道する要點は三學を完備し苦の邊際をなすにあり、しかもこれをなすには適當なる地位に居らなければならぬ、在家は愛欲煩惱に苦しめられつゝあれば、これを避けて出家生活をなすを最も便利とす、この目的のために和合せる團衆を僧伽といふ、この僧伽の組織も亦その先驅を波羅門教に仰いだのであつた。佛教僧伽の團體には理想からいへば一切世間の人をして平等無差別に隨意加入せしむることを許すのであるが、併し實際上の必要より自ら入會者の資格に制限を附し、入會の作法も漸次複雑

となるに至つた。僧伽の衣食住は少欲知足がその主眼であつて、僧伽の行儀には布薩或は自恣の日に於て、檀出懺悔等夫々相當の制裁があつた(佛弟子衆)。

次に「佛滅後の佛教」に移る、さて佛教史研究の史料として南北兩傳のあることはいふまでもないが、茲に南方といふのは便宜上錫崙、暹羅の如き波利語佛教を指すのであつて、地理的に一切の印度南方地方を指すのではなく、現に閩婆島の如き、地理的には南方であるが、その地に曾て行はれた佛教に、大乘教殊に祕密教のあつたことは、史料の證明する所であるから、學者はこの南北の意が便宜上の事であることに注意し、批評簡擇の見識を以て研究せなければならぬ。

著者の所謂根本佛教發達時代は七百餘年間で、その初期と末期との間には固より大差はあるが、併し等しく所謂小乗教であつて、要するに未だ一切衆生成佛の教を唱へず、唯斷煩惱得涅槃の教に過ぎないのである。この時代に於て學徒甲乙の間に思想の相違を來し、宗派の分裂を來したのは佛滅後滿一百年に至つてからである、著者はこの佛滅滿一百年以前を原始佛教時代と名け得べくば、これより龍樹に至る迄は小乗教發達時代と稱し得べしと謂て居らるゝ。その前者に屬する時代中に生起した重要事件はいふまでもなく第一結集である、著者は之を Culla Vagga 第十一章に依りて記述し、最後に北方所傳である大衆部結集即ち界外結集説を批評し「元來大衆の結集なるものは、大衆部の學徒が自己宗旨の起原を上坐部と同地位に置かんが爲に、其の年代を上坐結集と同時とせしものにして、敢て史實を語るものにあらず、大衆部

なる名稱は實に佛滅百年に生まれり」と述べられてゐる。次に根本枝末兩分派を南北兩傳の各に就て稍詳細に之を説き、兩大天と兩阿育の問題にも觸れ、大天に就ては佛滅二百年賊住大天こそ眞の史的な大天であるとし、阿育に就ては黑法同一説で、一は阿育の前半生を取り黒阿育と名け、一は阿育の後半生を取り法阿育と名けたものであらうと論述せられてゐる。

次に小乗諸派の宗義に移り、教義上大別して大衆、説一切有、犍子の三部となし夫々教義の説明及比較、その由來源泉を説き、阿育王と佛教との關係より、王在位中の佛教重要事件である第三結集、佛教の弘道に就て略述せられ、王の事業の一である傳教師の派遣は、王の正法大官派遣と相須つて佛教を印度の内外に弘通するに甚大の効力があり、錫崙には王の子マヒンダが佛滅二百三十六年に佛教を初めて傳へたといふことになつて居るが、しかしこれは公式の傳教であつて、「錫崙は南部印度特に其東岸なるカリンガ地方と古より交通ありたればマヒンダ以前より已に若干の佛教思想は備はり居りしならん」と想像して居らるゝ。

次に阿育王の終より迦膩色迦に至る間の王朝の變遷と佛教の狀況とを論述せられ、次に第二期即ち大乘教興隆時代に筆を移され

てある。釋尊出世の時印度の宗教思想界は亂雜昏迷の狀態であつたから、釋尊が時代の要求により單純清新なる道德的宗教を唱へられた様に、大乘教の興隆も時代思想の影響を蒙りて起つたのである、併し釋尊は反動的時代思想の要求に應じ反動的宗教を創唱せられたのであるが、大乘教の興隆は時代思想の變遷に連れて應同

的に形成せられたるものである、そしてその大乘教も全然新元素から成たものではなく、その淵源は遠く佛陀金口の直説に發し、諸學派の影響を受け、展轉發達したもので、決して晴天の霹靂ではないとし、大乘思想發展の徑路を佛典によりて論明し、最後に諸法實相論、阿頼耶識緣起論、眞如緣起論に就て簡明に論述せられ、前述の如く第三期は之を説かずして本書は結ばれてある。

著者は我國有数の梵文學者である、その造詣深い梵文學の知識を緯とし、著者の佛教史及び教理に對する見識を經とし、あらゆる難問題も其知識、見識から批評的に想像し解説せられ、甲乙思想の關係連絡などに就ても巧みなる推論が加へられてあるから、印度佛教史上の難問題に對する解釋の一方法として著者の説を認めることが出来ると思ふ。本書は「佛教大觀」の第二編として出版せられたのであるが、元は「佛教講義録」に載せられたものであつて、「通俗を目的」とせられたのではあるが、茲に所謂「通俗」とは著者の謙遜からか、然らずは發行者の要求から、形式的に言ひ表はされた「通俗」であるといふことが歴然として認めらるゝ位、専門的、研究的であることを感じた、印度佛教研究者に對し一參考書として推舉することに躊躇しないのである。唯「初には稍稍しくして後に應なるは」著者と共に遺憾に思ふと同様に、他日自由に著者の蘊蓄を披瀝せられん機を期せざるを得ぬのである。東京小石川原町六、丙午出版社發行、菊版二〇六頁、定價壹圓（本田義英）

## 感情の修養

文學博士 谷 本 富著

一一二

本書は、著者の自序にもあるやうに、その大部分は、去る大正五年十月より翌年三月に亘りて、神戸高等商業學校に於て講ぜられたるものをば、此度訂正増補して出版せられたるものである。著者によれば、現時一般の教育は、動もすれば智的に備して、情意の方面をば閑却して居る。同じく感覺の教育をば高調するにしても、その辨識的方面を重んじて、快不快の感的方面をば輕視するが、これは誤つて居る。否な世人は、兎角理論論といふが、理論の中にも實際は情緒による理論の方が遙かに多い。眞に人事の活機となつて、世を動かすものは、此の情緒による理論であつて決して單に冷やかなる智的推斷の能くする處ではない、況んや情緒は洵に人生の華であつて、これなくんばわれ等の生活は實に荒涼索莫たるものであらう。それ故に吾人はかの智的修養と共に、よく苦樂の感受性をば鍊磨して、一面享樂と共に又辛酸苦楚を嘗めて、これをば充分堪へ得る力を養ひ、これと共に又よく他人の不幸に同情し、更に進んでは、種々なる情緒、情操をば培養し、發展して、趣味あり意義ある生活をば爲すようにしなければならぬ。而してこれやがて本書出版の動機であり、又本書の主眼の歸結である。

本書章を分つこと十三、先づ第一章に於て、東西兩洋に於ける教育思想の歴史的趨勢を概観して、感情修養の必要を論じ、第二章に於ては、感情の一般的特質を述べて博士の所謂、樂悲勇怯喜怒哀愛惡欲の九情説をば豫説し、第三章に於ては、現代人の通弊と